

佐藤 義 尚

I

テーバイを追放されたオイディプスは放浪の後、ようやく終焉の地、アテナイ郊外のコロノスにたどりつき、そこで祭られていたエウメニデスの聖域に足を踏み入れる。ソポクレスの『コロノスのオイディプス』はこのようにして始まる。聖域を侵犯したオイディプスに対し、祓い浄めの儀式をコロスがこと細かく指示する。(465-92) これは、舞台演出の点から見れば、第2エペイソディオンでイスメネが、舞台外でクレオンに捕われるための状況設定をするという役割を果たしている。すなわち、浄めの儀式を執り行なわせるべくイスメネを立ち去らせるという状況を、この場面がつくっている。

従来、この箇所は第1エペイソディオンの中で位置付けて解釈されてきた。第1エペイソディオンでは、イスメネがテーバイから駆けつけ、兄二人の醜い権力闘争を報告する。これに対しオイディプスは、二人の息子を呪う。この次に静穏が支配する祓い浄めの場面になる。コロスの老人は儀式の詳細を指示したあと、敬虔な態度から一転して、好奇心からオイディプスにその過去を執拗に問い詰める。このときアテナイ王テセウスが登場し、威厳に満ちた、博愛的な態度から舞台に平穏に戻る。以上のように第1エペイソディオンは動と静の場面が交替して現れ、お互いに対照をなしている。祓い浄めの説明の場面もこの構成の一環をなしている。^{注1}

しかし、入念な記述はそれだけに留まらない意味が潜んでいることを暗示し、またこれが作り出す静謐な雰囲気は読者に特別な感銘を与える。この場面をさらに広い視野のもとに、作品全体の中に位置づけて解釈できないだろうか。

II

まず祓い浄めがどのような意味内容を持っているのかを確認しておかなければならない。自分をアテナイの救済者として語るオイディプスにコロスが次のように語って、祓い浄めの説明は導入される。

θεοῦ νῦν καθαρμὸν τῶνδε δαιμόνων, ἐφ' ἃς
τὸ πρῶτον ἴκου, καὶ κατέστειψας πέδον. 466-7^{註2}

女神らの祓い浄めを執り行いなさい。そのもとに最初に来て、地面を踏みにじったのだから。

δαιμόνωνという属格を目的格的に解釈しても、^{註3} 所有格的に解釈しても、^{註4} 祓い浄めは、オイディプスの聖域侵犯の汚れを浄めるという意味は変わらない。

説明される個々の儀式も汚れの浄めを指向している。説明で言及される羊毛とオリーブは、古来、祓い浄めに使われてきた。羊毛を混酒器に巻くのは、汚れを吸い取って汚れを防ぐためである。混酒器の水は汚れから守られて清いまま濯がれ、浄めを効果的にするだろう。オリーブの枝は嘆願者を印づけるものとして神にとっては親しい樹木である。オリーブは神との特別な関係から神聖な樹木として尊ばれてきた。このステータスゆえにオリーブは祓い浄めの権能をもつとみなされてきた。^{註5} 東を向いて灌ぎを捧げるのも、東方が光と清純の源であるため、浄めを行う者は東を向かなければならないからである。^{註6} そして灌ぎを贈られた女神は宥和的になり、悪意を持たなくなる。^{註7}

儀式で汚れが浄められ嘆願者としての資格が与えられて、受け入れを祈願する祈り(486-7)を捧げることが許される。この祈りは儀式で「最大の事」(μέγιστα 485)と言われ、祓い浄めを行う目的となるものである。

このような祓い浄めの記述からは、オイディプスが聖域侵犯による汚れを祓い浄め、女神の怒りを鎮め、当地への受け入れを嘆願する、という意味が読みとれる。

オイディプスは女神への嘆願者であり、またアポロンの神託を授けられてもいる。(86ff.)この二重の意味でオイディプスは*ιερός* (287)であり、^{註8} 元来聖域に属するものである。^{註9} したがって本来はオイディプスが聖域に足を踏み入れても、汚すことにはならないはずである。それにもかかわらず祓い浄めの儀式を執り行うことが指示される。この理由を理解するためには、オイディプスが聖域に足を踏み入れたときには、彼は嘆願者ではなかったという点に注目しなければならない。冒頭では、オイディプスとアンティゴネは自分たちがたどり着いたところがどこであるのか分からない。ここはどこなのかという問いで劇は始まり、それについての問いが繰り返される。^{註10} そしてここがエウメニデスに属する聖域であると聞かされてはじめてオイディプスは嘆願者として自覚する。(44)

神は行為そのものよりも、行為の意図、神に対する*εὐνοῦς* (499)があるか否かを問題とする。オイディプスに嘆願者としての資格があるにしても、嘆願者として聖域に足を踏み入れたわけではない。この意味で、オイディプスは聖域を汚してしまったことになる。オイディプスはすでに84-6,100ff.で女神に受け入れの嘆願をしているが、これらは嘆願者の祈りとしての条件を満たさず、女神によって受理されなかった。それゆえ祓い浄めによって嘆願者として認知されたうえで、祈りを改めて繰り返す必要があった。

さらにこの箇所では、コロスがオイディプスの処遇についてテセウスに指示を仰ぐ(294-5)としながらも、テセウスが到着する以前に受け入れ祈願を進言するということが問題となる。これについては、まずコロスがオイディプスに対し抱く恐れには二つのものがあることを知らなければならない。オイディプスの正体を知らないコロスが聖域からオイディプスを立ち退かせる。これは聖域侵犯によるエウメニデスの怒りを恐れての故である。したがってオイディプスが聖域の外に出れば、彼らにとって追い立てる必要はもはやない。

(176-7)しかし、相手がオイディプスであると知るや、国から追い出そうとする。(226,233f.)これはオイディプスという、ギリシャ世界周知の汚れを国内に受け入れることで招く神の怒りを恐れての故である。(256)コロスは、聖域侵犯と汚れという二つの側面からオイディプスに対している。コロスはオイディプスの処置についてテー

セウスに判断を仰ぐ。

... τοὺς δὲ τῆσδε γῆς

ἄνακτας ἀρκεῖ ταῦτά μοι διειδέναι. 294-5

これは、当地の王に裁定していただくのがいい。

この時点でオイディプスはすでに聖域から出ているので、コロスがテーセウスに指示を仰いでいる ταῦτα は、聖域侵犯ではなく、汚れとしてのオイディプスを受け入れるか国外追放にするか、という問題を指している。事実テーセウスが登場する場面で問題とされるのはオイディプスの受け入れだけである。(551ff.)

イスメネによってあらたに伝えられた神託、オイディプスの長いレシス(421ff.)を聞いて、コロスはオイディプスが救済者となることに納得する。^{註11} それは神託によって定められているが故に、オイディプスの受け入れは神の怒りを招かない。オイディプスの汚れに起因する恐れはコロスにはもはやない。この問題については、コロスは後でテーセウスに取り次ぐだけである。(629-30) 聖域侵犯に関する気がかりだけがコロスに残された。これはテーセウスに委ねた問題ではないのでその指示を待つことなく、これを解決するための祓い浄めをオイディプスに進言する。祓い浄めの指示には、オイディプスに「役立つこと」(464)を教示するための他に、聖域侵犯で共同体にふりかかる危険への恐怖(492)という動機もあったと考えられる。

III

祈願はオイディプスに関するものであるから、彼が祓い浄めを行わなければならない。しかし儀式を実際に執り行うのはイスメネである。イスメネが代行できる理由はその εὐνοῦς (499) にあるとされている。

ἀρκεῖν γὰρ οἶμαι κἀντὶ μυρίων μίαν

ψυχὴν τὰδ' ἐκτίνουσαν, ἣν εὐνοῦς παρῆ. 498-9

好意がありさえすれば、何万人の代わりにたった一人でもこれを

あがなうのに十分だ、と思うから。

このεὐνοῦςについては、オイディプスにたいする好意であるとする解釈と、エウメニデスにたいする好意(=εὐσεβεία)を意味するという解釈の二つがある。^{註12} 祓い浄めがエウメニデスに捧げられるものである以上、後者のようにとるのが自然であろう。しかしエウメニデスは畏怖すべき神であり、好意を抱くのは難しい。オイディプスにとっては神託のために恐れるべき女神ではないが、イスメネらにとっては本来は恐れるべき女神であるはずだ。それにもかかわらずここで彼女らが女神を恐れぬのは、神託をくだされたオイディプスに奉仕しているという意味で神との関係に連なっているからである。彼女らが女神に抱く好意は父親にたいする愛情に促されたものと言える。^{註13} アンティゴネ・イスメネのオイディプス・ポリュネイケスへの肉親としての愛情はこの劇では際立っている。この性格をここにも読みとるのは不当ではないだろう。このεὐνοῦςにオイディプスとエウメニデスの両方にたいする好意を読みとるのが妥当であると思われる。オイディプスが聖域に入ったとき、女神がその心中だけを問題としたごとく、ここでも灌ぎを捧げる人のεὐνοῦςだけが前提とされ、誰が捧げるのかといった外的条件は問題とされない。祓い浄めの形式が先に述べられたが、ここで執行者の内面に視線が向けられる。執行者が代わるといふ、儀式の条件で最大の変更が起こったにもかかわらず、これを補填し浄めを成立させる条件としてεὐνοῦςが提示され、祓い浄め・嘆願で最も重要なのは形式よりも、それを支える心であることが示される。儀式の形式はεὐνοῦςの発露でなければならない。^{註14} 表現のうえでも「一人」を表すのに μίαν ψυχὴν (498-9) という言葉が使われ、心の内面に視線が凝集している。嘆願におけるεὐνοῦςの重要性は、クレオン、ポリュネイケスのオイディプスに対する嘆願で再確認される。

アテナイの人々のオイディプスに対する態度は好意(εὐνοῦς 773)であるのに対し、クレオンにはそれが欠けている。クレオンは最初オイディプスに同情しながら近づくが、それは見せかけでしかない。表現上も上辺の好意と内心のよこしまが繰り返され、クレオンの好意の欠如は強調されている。(783, 794, 806-7) 嘆願を行う者が備え

ていなければならない第一の条件を欠いているので嘆願は聞き届けられない。聞き届けられるであろう嘆願と、拒絶される嘆願の対比をここに読みとることができる。

ポリュネイケスが登場する箇所では、彼が嘆願者であることが、「嘆願者」(προστάτης 1171, προστάτην 1278)「嘆願者の」(προστροπαίους 1309)「嘆願する」(ικετεύομεν 1327)「嘆願者としての座」(θακήματι 1160, ἔδρα 1163, ἔδραν 1166, θάκημ' 1179, θάκημα 1380)「嘆願者としてひれ伏す」(προσπεσόντα 1157)という言葉を繰り返すことで強調されている。ポリュネイケスはポセイドンの祭壇に嘆願していたが、オイディプスに面会を許される場面では、嘆願の形式がそのまま移行し、^{註15} オイディプスに対する嘆願となる。オイディプスは嘆願者から嘆願される者になり、怒りを招いたオイディプスが今度は怒りを抱く。乞食であり、異邦人であり、他人にへつらって生きなければならない(1335-7)という点でオイディプスと同じ境遇にあるポリュネイケスがここでは嘆願者になり、しかもここではオイディプスと「同じ」ということが表現の上で強調され(μὲν ἡμεῖς...δὲ σύ, σύ τε κἀγώ, τὸν αὐτὸν), 両者の役割交代が明確にされている。このようにこの箇所は祓い浄めの説明と対称的な構造をしている。

一方二つの場面には相違点がある。ポリュネイケスが嘆願するのは、弟に対する復讐のためと自分がテーバイで王位につくためであり(1329,1343), オイディプスに対する敬意からではない。またここではポリュネイケスはオイディプスをテーバイのまちの中に迎え入れることを申し出る。(1342)これはオイディプスが最初に望んでいた条件である。(406-8)それにもかかわらずオイディプスがポリュネイケスを拒絶するのは、息子が子としての義務を果たさず、親をないがしろにしたからである。(1356-7,1362-4,1377-9)つまりポリュネイケスは父親に息子としての好意を抱いていなかったからである。嘆願者の重要な条件を欠いているので、その嘆願が聞き届けられない。祓い浄めの説明と同じ要素で構成されているだけに、嘆願の拒絶が際立つことになる。ポリュネイケスの嘆願が退けられる場面は、祓い浄めの説明の箇所を下敷きとして、それとの対照で構成されていると言える。

以上からイスメネがオイディプスの代わりに祓い浄めを行うことは、εὐνους ゆえに聞き届けられる嘆願と対比して、その欠如ゆえに聞き届けられない嘆願を描くための伏線となっていることが分かる。

IV

祈願の内容、オイディプス受容は劇中ではオイディプスの「救済者」(σωτήρ)としての性格と結び付けられて繰り返し現れる。オイディプスが受け入れをコロスに「私を助け、守ってください」(ρύου με κάκφύλασσε, 285) と嘆願する箇所では、「この市民らに利益をもたらす」(φέρων ὄνησιν ἀστοῖς τοῖσδ', 287-8) ことを理由にしている。祓い浄めの直前ではオイディプスをコロスが「助ける」(ἀλκὴν ποεῖσθαι, 459) ならば、「この国のために偉大な援助者を得る」(τῆδε τῆ πόλει μέγαν σωτῆρ' ἀρεῖσθε, 459-60) ことになる」と述べられている。オイディプスがテセウスに嘆願するさいにも、「オイディプスを役に立たない住人として受け入れる」(Οἰδίπουν ... ἀχρεῖον οἰκητῆρα δέξασθαι, 626-7) ことにはならないと言い、これにたいしテセウスは「この地と私に少なからざる捧げものをしてくださる。・・・(オイディプスを) 市民として土地に住まわせよう」(γῆ τῆδε κάμοι δασμόν οὐ σμικρόν τίνει. ... χώρα δ' ἔμπολιν κατοικιῶ. 635-7) と承諾する。

この土地に受け入れられることと、ヘーロース(ἥρωσ)となり救済者としてまちを守護することが密接に関係するのは、ヘーロースの特質のためである。ヘーロースは神に準ずる存在であるが、それを神から隔てているのは、ヘーロースの地域限定性という特質である。ヘーロースは墓があるところにしばられ、ヘーロースの及ぼす作用はその墓の周辺に限定されている。墓から遠く隔たっているところでは、ヘーロースとの絆は絶たれてしまう。^{注16} したがってヘーロースの遺骨を所持することがヘーロースの加護を得るために必要であり、国家は墓の場所を秘密にして遺骨が持ち去られることを防いだ。オイディプスの死んだ場所が秘密にされるのもこの故である。^{注17}

オイディプスを受け入れ、コロスを彼にとっての「安息の地」(88)となすことが、オイディプスとその地のヘーロースになるため

の前提条件である。オイディプスはコロノスに受け入れられて初めてヘーロースとしての効力を発揮することができる。オイディプスがヘーロースとなり、意志どおりに、クレオン、ポリュネイケスにたいする怒り、呪が有効になるためには、コロノスに受け入れられ、他には連れ去られないということが条件となる。^{註18} オイディプスが受け入れられれば、それは直ちに、彼が救済者としてその地に利益をもたらすことを意味する。それゆえ、この二つの主題、オイディプス受容と救済者としてもたらす利益とは密接に連携し、表現のうえでも一体化されている。^{註19}

オイディプス受け入れの祈願が聞き届けられるであろうことを示しているのが、儀式の場面である。濯ぎによる祓い浄めでオイディプスの聖域侵犯の汚れが浄められ、エウメニデスに嘆願者として認知される。嘆願者オイディプスの祈願は聞き届けられるだろう。オイディプスがアテナイのヘーロースとなるための条件、聖域への受け入れがここで満たされることになる。作品の主題、オイディプスのヘーロースへの転化が成立するためには、祓い浄めの場面が必要であった。

V

さらに濯ぎがエウメニデスにたいする捧げ物である点にも注目しなければならない。オイディプスとエウメニデスの親近性は作品のモチーフの一つとして挙げることができる。オイディプスが、自分が足を踏み入れた場所がエウメニデスの聖域であると知ったとき、彼は恐れるどころかアポロンの予言が成就したことを喜ぶ。(44f.) これはコロスが、エウメニデスにたいし示す恐怖とは対照的である。またオイディプスは、女神に $\delta\epsilon\iota\nu\tilde{\omega}\pi\epsilon\varsigma$ (84) と呼びかけるが、これに対応するように、コロスがオイディプスを初めて眼にしたとき、「見るも恐ろしく、聞くも恐ろしい者よ」($\delta\epsilon\iota\nu\tilde{\omega}\varsigma \mu\acute{\epsilon}\nu \acute{o}\rho\tilde{\alpha}\nu, \delta\epsilon\iota\nu\tilde{\omega}\varsigma \delta\acute{\epsilon} \kappa\lambda\acute{\upsilon}\epsilon\iota\nu$.141) と叫ぶ。コロスはあたかもエウメニデスにたいするかのよう、オイディプスに反応している。^{註20} 別の箇所ではオイディプスは、エウメニデスに「親愛な子よ」($\tilde{\omega} \gamma\lambda\upsilon\kappa\epsilon\acute{\iota}\alpha\iota \pi\alpha\acute{\iota}\delta\epsilon\varsigma$ 106) と呼びかける。ここでの $\gamma\lambda\upsilon\kappa\epsilon\acute{\iota}\alpha\iota$ は、エウメニデスにたいし使われる

epithetとしては、異例な形容詞である。また、オイディプスがアテナイを守り、役にたてるという申し出に、テーセウスは「だれがこのような方の好意を退けられようか。」(τίς δῆτ' ἄν ἀνδρὸς εὐμένειαν ἐκβάλοι ...; 631)と答える。ここで使われている εὐμένειαν という言葉は普通は神について使われる言葉であり、浄めの際の祈願の言葉「慈悲深い心から受け入れてください」(ἐξ εὐμενῶν στέρνων δέχεσθαι 486) という表現から、エウメニデスの名前を強く喚起する。さらにポリュネイケスはオイディプスに味方になることを退けられた際に語る。

... ἀλλ' ἐμοὶ μὲν ἤδ' ὁδὸς
ἔσται μέλουσα δύσποτμός τε καὶ κακὴ
πρὸς τοῦδε πατρὸς τῶν τε τοῦδ' Ἐρινύων. 1432-1434
私にとってこの道は、この父とそのエリニュスのために不幸で不吉なものとなるでしょう。

ここでは、オイディプスとエウメニデスが並べられている。

このようなオイディプスとエウメニデスの親近性は、両者が共通の性格を分け持っていることに由来する。ヘーロースとエウメニデスのような冥界の神とは、両者の影響力が特定の地域に限定されている点で似ている。^{註21} 冥界の神は人間に危害を加えると同時に、豊穡をもたらす。ヘーロースも尊崇を受ければ加護を加え、受けなければ災厄をなす。^{註22} 女神は、エウメニデスとしては祝福し、エリニュスとしては呪をもたらし。同様にオイディプスは、受け入れてくれたアテナイには祝福を、敵には呪を与える。劇の初めで強調された、女神の破壊的な力は、その嘆願者たるオイディプスをとおして実現されていく。最後には、彼は冥界の神として女神の仲間になり、復讐と祝福という二重の力にあずかる。

以上のようなオイディプスとエウメニデスの関係が実質のあるものになるためには、両者の関係が修復されていなければならない。これを示し、両者の親近性というモチーフに根拠を与えているのが祓い浄めの場面である。

VI

『コロノスのオイディプス』は構成的には大きく四つに分けられる。第一部(1-719)はオイディプスがコロノスにやってきて、受け入れられることを叙した箇所。第二部(720-1149)はクレオンにまつわるエピソード。第三部(1150-1446)はポリュネイケスにまつわるエピソード。第四部(1448-1779)はオイディプスがこの世から消えるくだり。

第四部のオイディプスが消え去る場面では、再び第一部に戻ったような印象を受ける。実際、この二つの場面には共通するモチーフがいくつかある。劇冒頭では聖域侵犯をめぐる場所についての記述が鋭敏になっている。劇の最後でもオイディプスに導かれてテーセウスらの一行がオイディプス終焉の地へ行く途中で休止する場所が細密に述べられている。(1590-7)特に祓い浄めの場面と共通するモチーフに注目すると、その休止した場所でもオイディプスは浄めと灌ぎのための水を持ってくるように命じ、しかるべく浄められる。(1597-1603)ここでは祓い浄めというモチーフだけではなく、語彙の面でも似ている。^{注23} また祓い浄めの説明では祈願をしたあと、後ろを振り返らずに(ἄστροφος 490)立ち去るように指示されている。これは捧げものを自分のものにするために姿を現した神を見て、神を怒らせないためである。^{注24} 最後のところでは、使者たちはオイディプスとテーセウスを後に残して立ち去るときに、見てはならないという命令(1641-2)にもかかわらず、後ろを振り返り(στραφέντες 1648)タブーとされる場面に眼を向けてしまう。しかしそこに見たのは、なにか恐ろしいものが現れたかのように手を眼にかざしているテーセウスの姿だけであり、(1650-2)神に対する恐れはばかりから神の姿を見ないというタブーは破られない。この後ろの振り返りのモチーフも二つの場面に共通している。

共通のモチーフで対応が示されているだけでなく、場面のテーマの点からも祓い浄めに直接続くのは第四部である。祓い浄めはオイディプスの受け入れ祈願を目的としていた。第四部はその祈願を受けて、オイディプスがこの世からヘーロースとなるため消え去る。オイディプスの死というクライマックスを導入する役割を祓い浄め

は果たしている。

祓い浄めを説明する箇所は、作品のテーマであるオイディプスのヘーロースへの転化が成立するために必要であった。さらにそこで描かれた嘆願者のあるべき姿にたいする対比としてクレオン、ポリュネイケスの場面は描かれている。これらの意味で祓い浄めは従来考えられていたよりも作品の中で重要な位置を占めていると思われる。

注

^㉑ Winnington-Ingram, R.P., *Sophocles. An Interpretation*, Cambridge 1980. p.250 Kamberbeek, J.C., *The Plays of Sophocles. The Oedipus Coloneus*, Leiden 1984. p.9

^㉒ *Sophoclis Fabulae*, ed. A.C. Pearson, Oxford 1957 (first published 1924) を本稿ではテキストとして用いる。

^㉓ καθαρόν τῶνδε δαιμόνων = κάθαιρε τάσδε δαίμονας (Wunder). = ἴλασαι τάσδε δαίμονας (Schneidewin-Nauck).

^㉔ 「女神らに属する祓い浄め」すなわち「女神らに捧げられて当然の祓い浄め」(Jebb). さらに属格に分離の意味を読みとる解釈が示唆されている。「女神の怒りからの祓い浄め」(Kamberbeek)

^㉕ Eitrem, S., *Opferritus und Voropfer der Griechen und Römer*, Kristiania 1915. (Nachdruck, Hildesheim 1977) S.380, 383. Parker, R., *Miasma: Pollution and Purification in Early Greek Religion*, Oxford 1983. p.228f. Gow, A.S.F., *Theocritus*, vol. II, Cambridge 1950. p.36f, 431. Bowra, C.M., *Sophoclean Tragedy*, Oxford 1944. p.318f.

^㉖ Jebb, R.C., *The Oedipus Coloneus*, Cambridge 1907. p.83.

^㉗ Eitrem, S., op.cit. S.110. 汚れを祓い浄めると言っても、実際には、神の怒りという、汚れの結果を浄めることになる。汚れとその招いた結果との間にはっきりした境界線を引くのは難しい。(Parker, R., op.cit. p.10)

^㉘ Blundell, M.W., *Helping Friends and Harming Enemies. A Study in Sophocles and Greek Ethics*, Cambridge 1989. p.230

^㉙ Burkert, W., *Greek Religion*, tr. by J. Raffan, Cambridge, Mass. 1985. p.269

^㉚ τίνας χώρους (1-2), ὅποι καθέσταμεν (23), ὅστις ὁ τόπος (26), τίς δ' ἔσθ' ὁ χώρος; (38)

^㉛ ἐπάξιος (461). εἰ 「もし」ではなく ἐπεὶ (462) 「～なので」が用いられている。これらの表現は、オイディプスが神託を受けた救済者であることをコロスは事実として認定していることを示す。

^㉜ Kamberbeek はオイディプスにたいする好意と解釈し、Schneidewin-Nauck, Jebb はエウメニデスにたいする好意と解釈している。Kamberbeek はこちらの解釈の可能性も示唆している。

¹³ アンティゴネ、イスメネのエウメニデスに対する態度は、はっきりとは書かれていない。アンティゴネは、コロノスの男が立ち去った後でオイディプスに、聖域の中にいるにもかかわらず「これで静かに(ἐν ἡσυχίᾳ) 話すことができます」(82)と言い、恐れの色を見せない。聖域から出て行くのも女神への恐れからではなく、「まちの人々と同じことをならいとしなければならぬ」(171-2)からである。アンティゴネが一般の人と同じようにエウメニデスに対していないことは明らかであろう。イスメネのエウメニデスに対する態度についてはさらに明らかでない。しかし、オイディプスが娘たちの「どちらか」(σφῶν ἀτέρα, 497)に祓い浄めを行うように命じ、二人のうちのいずれかを特に指名してはいないこと、劇中で繰り返しアンティゴネ・イスメネが双数で表現されていること、(344, 445, 111, 1257, 1407, 1435, 1444, 1619, 1670, 1683) これらから、二人が同等の立場にあるとみなしてもゆるされるだろう。

¹⁴ 儀式における内面と外面の一致については、Burkert, op.cit. p.77. Lesky, A., *Geschichte der griechischen Literatur*, Zweite Auflage, Bern 1963. S.325.

¹⁵ Blundell, op.cit. p.240n.46

¹⁶ Burkert, op.cit. p.206. Rohde, E., *Psyche. Seelencult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen*, Freiburg i.B.1898. (Nachdruck, Darmstadt 1961) S.184f., 189f.

¹⁷ Rohde, op.cit. S.160ff., S.162 Anmerkung 2. v1522f.

¹⁸ 神託を聞いたクレオンがオイディプスをテーバイへ連れ去り、味方に付けようとするのは、オイディプスが彼に対し怒りをはらんでいることと矛盾しているように思える。しかし、敵たるヘーロースをなだめようとするには例がある。ソポクレス『エレクトラ』405ff.ではクリュソテミスがアガメムノンの墓に、クリュタイメストラからの供えものを捧げに行く。クレオンがオイディプスを連れ去ろうとするのも、あとでオイディプスをなだめ味方につけるためと思われる。クレオンが連れ去ろうとするについては、オイディプスの意志を自分の思いのままにしようとするクレオンの利己的な性格を読みとるべきであろう。

¹⁹ 487でPearson (OCT, 1924), Lloyd-Jones and Wilson (OCT, 1990), Dawe (Teubner, 1979)は、写本のσωτήριονをσωτηρίουςに変えるBakeの読み方を採用し、エウメニデスがオイディプスの救い主であると解釈する。「(エウメニデスが)救い手となって嘆願者を受け入れてください」しかし、この場面の意味が、オイディプスが救済者になるための条件づけであるということから、この箇所はオイディプス受容と救済者になることの一体化した表現の一つとみなすべきだろう。したがって写本どおりに読み、「(オイディプスが)救済者となるべく嘆願者を受け入れてください」と解釈するほうが妥当であると思われる。

²⁰ Winnington-Ingram, op.cit. p.267ff.

^{注21} Rohde, op.cit. S.184f.

^{注22} W.H.D.Rouse, *Greek Votive Offerings*, Cambridge 1902. p.9

^{注23} ἀειρύτου, χοάς 469. χοάς 477. ῥυτῶν 1598. χοάς 1599.

^{注24} Garvie, A.F., *Aeschylus Choepori*, Oxford 1986. p.70f. Rohde, op.cit. S.85 Anmerkung 2. Gow, A.S.F., op.cit. p.430.